「安息日の主」
マルコ２：２３- ３：６

平吹光太　２３.７.３０

本日の箇所は安息日についての事が記されている。ここから、安息日の意味を知り、主の願われている安息日の過ごし方を共に教えられ主の御心をますます求め、歩む者とされていきたい。

I. 安息日の意味

「ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられたときのことである。弟子たちは、道を進みながら穂を摘み始めた。」（23）

安息日の元々の意味は「やめる」。創世記の天地創造の時、神が６日間で世界を創造され、７ 日目に創造の働きをやめられ休まれたことから来ていることば。当時の安息日は、金曜日の日没から土曜日の日没まで。主イエスが復活されてからはその復活された日曜日を安息日としている。この安息日に関して、十戒の第四戒に**「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。」**（出 20:8-11）と定められている。主イエスの弟子達は道を進みながら穂を摘み始めたと記されている。彼らが安息日にしたこの行動が後に問題視される。

「すると、パリサイ人たちがイエスに言った。『ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか。』」（24）

突然、パリサイ人達が現れ、主イエスに弟子達の行動を非難し始めた。パリサイ人達は神から与えられた律法に新たな規則を付け足し、全ての規則を守り行うように人々に命じ、守らない者には厳しくする者達であった。パリサイ人達の訴えは他人の畑から許可なく穂を摘んだ泥棒だと主張しているのではない。当時の律法では、**「隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使ってはならない。」**（申 23:25）とあった。そのため、麦を手で摘んで食べることは何の問題もなかったが、パリサイ人達が目をつけたのが安息日にしたということ。彼らの規則では安息日にしてはいけない事は働いてはいけないことから派生して 39 項目の安息日にしてはならない事が定められていた。当時の律法から派生し、独自のルールに縛られていたパリサイ人達にとって弟子達がした事はどうしても許されない事であった。そのようなパリサイ人達の指摘に対して主イエスは答えられる。

「イエスは言われた。『ダビデと供の者たちが食べ物がなくて空腹になったとき、ダビデが何をしたか、読んだことがないのですか。大祭司エブヤタルのころ、どのようにして、ダビデが神の家に入り、祭司以外の人が食べてはならない臨在のパンを食べて、一緒にいた人たちにも与えたか、読んだことがないのですか。』」（25-26）

この箇所はⅠサムエル記に記されている。これはダビデが王になる前のことで、サウル王から嫉妬され命を狙われ追われていた時のこと。そのダビデは空腹のあまり祭司以外食べてはいけなかった神に捧げられた備えのパンを食べてしまったという出来事。けれども主イエスがこの出来事で言いたいことはこの後のこと。それは食べてはいけないと言われていたパンを食べたダビデは、神から何一つ咎められなかった。このことから主イエスは、杓子定規になって律法、規則は絶対だからというのではなく、律法や規則よりも人の必要の方が大切であることを主イエスは言われた。

II. 安息日の主

「そして言われた。『安息日は人のために設けられたのです。人が安息日のために造られたのではありません。ですから、人の子は安息日にも主です。』」（27-28）

主イエスは安息日の本当の意味を教えてくださった。それは人のために設けられたということ。天地創造の 7 日目に何を神はなされたか？神ご自身がお造りになられた全被造物、特に人の存在を喜び祝福してくださる日を設けてくださった。安息日が先に設けられ、安息日のために後から人が造られたのではない。主イエスは律法よりも人の必要を神は優先されることを言われた。ここで思い違いをしてはいけない事は、人の必要を神が一番に思っておられるのなら、安息日は自分が必要だと思うように好き勝手に生きようと思うことを勧めているのではないということ。私達は自分に何が必要で何が欠けているのかも分からず、また人と比較をして自分に足りないものに目を向け、本当に必要なものを見失う弱い者。けれども神は私達の全ての必要をご存知で、私達の必要に答えてくださる。「人の子は安息日にも主です」と主イエスが言われた事は主イエスが安息日の主であり、礼拝のあり方、安息日の守り方を定めるお方であるということ。主イエスはご自身を父なる神と等しい権威を持つものであることを示された。神が祝福してくださっている素晴らしい安息日を私達が覚える時、「この日は神様のための日です」となる。神が祝福し招いてくださっているので、喜び集い神に礼拝をお捧げできている。私達は安息日をどのように過ごす事が最善なのかを主にいつも聞きながら歩ませて頂きましょう。

III. 安息日の隣人への愛

「イエスは再び会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。人々は、イエスがこの人を安息日に治すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。」（1-2）

主イエスは安息日に会堂にいた片手の萎えた人を通して、安息日をどのように過ごすべきかを教えられ　ている。病気によって片手が動かない人がいた。「人々」とはパリサイ人達のこと。安息日に病をいやす事もパリサイ人達の律法では禁止。しかし命に関わることであれば助けることは彼らの律法で許されていた。この片手の萎えた人は命に関わる程ではなかったため、パリサイ人達はイエスがどうするか見ていた。主イエスはそのような状況で行動される。

「イエスは、片手の萎えたその人に言われた。『真ん中に立ちなさい。』それから彼らに言われた。『安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも殺すことですか。』彼らは黙っていた。」（3-4）

パリサイ人達にとって片手の萎えた人はただの実験台に過ぎないが、主イエスにとっては尊い存在。主イエスは今まで人々から傷つけられ、悲しみと孤独の中にいたその人に主イエスは「真ん中に立ちなさい」、「わたしの元に来なさい」と神の元へと導いてくださった。そして主イエスはパリサイ人達に安息日にしてはいけないことではなく、本来何をすべき日、どのようにすべき日かを問われた。しかし誰一人主イエスの問いに答える者はいなかった。私達が主イエスにあなたは善を行うのか？悪を行うのか？いのちを救うことか？それとも殺すことか？と問われたらどのように答えるか？私達は善を行うこといのちを救うことですと心から答えられないのではないか。なぜなら私達の心にもパリサイ人達と同じような頑なな心があるから。今までの人生の中で神に喜ばれる選択を出来ずにいた思いがいくつかあるかもしれない。けれども今、私達はそのような頑なな心を変えて頂くため、神の前に正直に打ち明けていきたい。そして私達は共に神を礼拝する中で辛く苦しい状況にある隣人に寄り添えているか心を向ける者でありたい。

IV. 主の元で休む

「イエスは怒って彼らを見回し、その心の頑なさを嘆き悲しみながら、その人に『手を伸ばしなさい』と言われた。彼が手を伸ばすと、手は元どおりになった。パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。」（5-6）

パリサイ人達は自分達の間違いに気付かされたがその間違いを認めて悔い改められなかった。そのよう　な彼らを主イエスは嘆き悲しまれた。主イエスは片手の萎えた人をいやされた。その人にとって家族にとってとても喜ばしい事であった。しかし、パリサイ人達は反論できず、怒りに燃え、そこを出て行きヘロデ党の者達と一緒にどうやってイエスを殺すかを相談し始めた。

安息日に病のいやしを行ったことで主イエスはパリサイ人達とヘロデ党の者達に殺害計画をさ

れた。な　ぜ主イエスは安息日に病のいやしを行ったのか？命に関わる病ではなかったので、次の日でも良かったのではないか？主イエスは体の緊急性ではなく、片手の萎えた人の心の緊急性を見ておられた。主イエスはいつどうなるか分からないその人のためにすぐに体だけではなく、心にも触れいやされた。
主イエスだけが本当の安息を与えてくださる。**「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」**（マタイ 11:28）それは私達にとって必要不可欠な神がくださる安息日の休み。私達はいくら休んでも回復せず、神にだけしかいやす事が出来ない心の悩み、傷、苦しみなどがある。私達は安息日に主の前に深く静まり、主の教会で神を礼拝し説教のみことばで養われ私達に必要な安息をいつも主から頂きながら主を愛し、隣人を愛し主の御心を求めて歩んで参りましょう。